

【迎恩門再論】

前回に続いて今回も「朝鮮の写真アルバム」について触れます。

前回の原稿を載せた後、尹凡牟『韓国近代美術 時代精神と正体性の探求』（ハングルアート、2000）という書籍の一部に目を通すことが出来ました。尹凡牟は朝鮮における写真撮影の先駆者である黄鋏の遺族から提供された黄鋏の伝記を韓国の学界に紹介しました。『韓国近代美術 時代精神と正体性の探求』にも黄鋏撮影の写真が掲載されています。

その写真の中で尹凡牟が貴重と評価するのが迎恩門を写したものです。前回載せた迎恩門と似た絵柄ですが、反対方向から撮影したものとみられます。

尹凡牟はこの写真の撮影時期を1885～1896年と推測しています。下限の1896年は、前回書いたようにこの門が取り壊されたのが1896年だからですが、一方、尹凡牟は撮影時期の上限を1885年としています。その根拠は、門の左側に高い木柱が写っているからです。

尹凡牟によれば、これは同年9月に架設されたソウル～平壤間の電線をつなぐ電信柱だということです。

前回紹介した写真では、分かりにくいですが、電柱が逆の右側に写っており、今回、その部分分かるよう、トリミングしてみました（図1）。ぼんやりとしてはいますが、お分かりになるでしょうか。



図1

【守禦將臺】

図2はソウル近郊の南漢山城に現存する「守禦將臺」の写真です。南漢山城はソウル防禦のために整備された山城で、今はソウル市街を一望できる人気のハイキングコースとなっています。1636年に清が朝鮮を攻めた丙子胡乱で仁祖が籠城したことで知られます。



図2

將臺は戦時に将軍が指揮を執るために上った臺です。南漢山城には四つの將臺がありましたが、守禦將臺は今も残る唯一のものです。黄鋏は写真撮影が国家機密の漏洩に当たるとして投獄などされたことがありましたが、守禦將臺こそ、そ

のような機密に当たるとみられたのかも知れません。

【洗剣亭】

図3は『韓国近代美術 時代精神と正体性の探求』にも同じ写真が載せられ、同書のキャプションに「黄鋳、洗剣亭、1880年代推定、個人所蔵」とあります。



図3

洗剣亭は北漢山城とソウルの城郭をつなぐ場所に位置し、風光明媚な溪谷に建てられた東屋です。名前の由来は諸説あるそうですが、仁祖のクーデターの際、反乱軍側の人士らがここで剣を洗ったから名付けられたという説が有名です。この周辺は軍事的にも重要視されていました。

また、王朝の実録などが編纂されると、その時に書かれた草稿の文字を読めないようにするのですが、その作業を洗草といい、亭前の一枚岩の上で行われました。実際の作業について、川の水で墨を落とすだけのように思われたこともありましたが、実際は水に浸して粉碎されていたようで、川西裕也「朝鮮後期における御諱・御押・御筆資料の廃棄—洗草の再検討—」（『朝鮮学報』第256輯、20

20年12月)に詳しく書かれています。

世間は大型連休に入り、韓国旅行に出かける方も多いと思います。名所旧跡が撮影されたこのアルバムの写真と比較するのも面白いかも知れません。

2025年4月29日 広沢有久

*前々回の「須永文庫より(十五)」は修正があったので差し替えました。

須永文庫資料研究室のアドレスは <https://sano-haku.com/sunaga-bunko/>